

絹の道、彼方へ消えた異郷の民・ソグド

シルクロード英雄列伝の第三回は、シルクロードの歴史に大きな足跡を残し、忽然と歴史の彼方に消えていった民族のお話です。彼らは大きな帝国ではなく、ペンジケント、サマルカンド、バイケントなどの小さな都市国家しか形成しなかったにも関わらず、シルクロードの歴史に深くかかわり、中国やアラビアの史書にも登場します。――その民族の名はソグド人。

シルクロードの商人

ソグデアナと呼ばれた故郷から隊商を組み、はるばる中国、アラビアまで足を伸ばす商人として活躍したソグド人。その足跡はシルクロードの歴史に深く刻まれています。彼らはまず商才に長けた商人でした。文字通りシルクはもとより、香辛料、香木、駱駝や馬、そして奴隷まで商っていたと言われています。

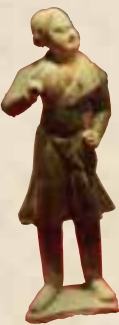
ソグド人は子供が生まれると、口に蜜を含ませ、手には膠を塗ったとの記述が中国の史書に残されています。これには、将来蜜のように甘い言葉で商いをし、掴んだお金を離さぬようにとの願いが込められていました。

隊商を組んで広いシルクロードで安全に商いをするには、その国の政治状況、治安状況、文化の流れなど、様々な「情報」が必要になります。その国ではどのような商品が好まれるのか、政変の気配がある国はどこか等、様々な情報をもとに商いを行いました。彼らが情報収集能力に長けていたのは、各地に張り巡らされたソグド人のネットワーク故でした。彼らの一部は商いで赴いた国に定住し、コミュニティを形成していったのです。

中国に定住した彼らは「胡人」と呼ばれ、中国姓を名乗りました。姓は彼らの出身地ごとに分かれており、例えば、サマルカンド出身のソグド

人は「康」、ブハラ出身は「安」、タシケント出身は「石」となります。また彼らがもたらした西域の文化は当時の中国で好まれ、胡旋舞と呼ばれる、新体操のようなリボンを両手に持ち小さな円形の敷物の上で回転する踊りが大流行しました。

赴いた地に同化した彼らは、商業のみならずその国の政治、文化にも大きな影響力を持つ民族へと変貌を遂げます。



中国史上最大のクーデター

唐の時代、ソグド人によって国家を揺るがす大きな政変が起きました。政変の中心となった男の名は、ソグドの言葉で「光」。中国に定住したソグド人でした。彼はロクシャンというソグド名を漢字で「祿山」とし、中国では安祿山と名乗りました。子供の手に膠を塗るソグドの風習を、彼も生まれた時に受けたのかもしれませんが、彼が握ろうとしたのはお金ではなく、彼が生きた地、唐帝国の権力だったのです。

安祿山は父方がサマルカンド出身のソグド人でした。母方は突厥系でしたが、唐の政界で頭角を現し、時の玄宗皇帝の寵を受け、さらに妃の楊貴妃に取り入り宮廷を自由に出入りするまでにになりました。その背景には、唐各地に住むソグド商人達からの莫大な貢物があつたと言われています。

紀元755年、彼は兵を起こして洛陽を陥落。自らを聖武皇帝と名乗り、国号を燕と変えます。クーデターを起こしたのです。これが中国史上最大の反乱と言われる安史の乱です。安祿山は首都の長安をも奪い、玄宗皇帝は蜀へ

と逃れます。ざりとて簡単に大帝国の天下を奪うことはできませんでした。安祿山は反乱のさなか病で失明し、その後暗殺されます。彼の息子などに引き継がれた安史の乱は、以後8年に渡って唐を揺るがしますが、同時に後のソグド人に大きな影をもたらし、反乱の後、唐はソグド人を肅清します。「胡面」という西域の顔立ちをした者は、すべて殺害されていったのです。さらに時を同じくして、ソグド人の故郷のソグデアナには、西方からのイスラム王朝が押し寄せます。ゾラスター教徒であつたソグド人はイスラムへの改宗を拒み、ここでも多くのソグド人が消えていきました。そして故郷の一つペンジケントの都には、火が放たれました。

東と西からの歴史のうねりに呑まれ、ソグド人はシルクロードの舞台から消えていきました。現在、ソグド人という民族をシルクロードで見ることができません。彼らはその後の長い年月の中で、トルコ系民族と同化し、イスラム教へと改宗していきます。民族的、宗教的にも、ソグド人のアイデンティティが呑み込まれていったのです。

日本への伝播

シルクロードの歴史に登場し、中国史にも大きな足跡を残したソグド人。しかし忽然と消えていった彼らの面影は、日本でも垣間見ることが出来ます。中国で胡人と呼ばれた彼らが西域からもたらしたものの名前には、「胡」から始まるものが多く、胡瓜、胡桃、胡麻などは、現在も日本で使われています。また、彼らは長身で長い手足を持つアーリア系の民族のため正座をする習慣がなく、足を組んで「あぐら」をかいていました。あぐらも漢字で書くと、胡人が座る、すなわち「胡坐」と書きます。

彼らのもたらした名前だけが、1200年以上経った日本にも残っています。中国からの文化だけでなく、商人として活躍し各地に赴いたソグド人自体も、海を渡り日本にも渡来していたのではないかと。そして、日本の中にも一部同化したのではないかと。そう思うと、我々日本人がシルクロードに抱く感情は、憧れと同時に、遠い記憶とも言える気がします。

ページ中央/ソグド人と駱駝を模った唐三彩(甘肅省博物館蔵)
右下/ペンジケント遺跡出土ソグド人の壁画(ドゥシャンベ国立博物館蔵)

COLUMN 日本の伝承に残るソグド人の足跡

日本書記に登場する神の一人に、猿田彦がいます。「ニニギノミコト」の天孫降臨の際に道案内をした、高い身長と高い鼻を持った神様ですが、彼は大陸から渡来した胡人ではないかという説があります。ソグド人の言葉でキャラバンのリーダーを表す「サルト・ポウ」という言葉は、中国では「薩保」と書かれ、中国に定住したソグド人の肩書に使われました。このサルトという言葉が猿田になり、道案内をするキャラバンのリーダーと結びついて、道案内の神として日本の神になったという説があります。また鼻が高いこの神の容姿から、後の天狗の原型とも言われています。日本の伝承の中にも、彼らの足跡が残っているのかもしれませんが。



関連ツアーのご紹介



世界遺産のヒヴァ、ブハラ、シャフリサブス、サマルカンド四都周遊
文明の十字路 ウズベキスタン

東京・大阪発着 | 9日間



ソグデアナからスルハンダリヤへ
ソグド人の軌跡と仏教伝来の道
タジキスタンとテルメズの遺産

東京・大阪発着 | 9日間